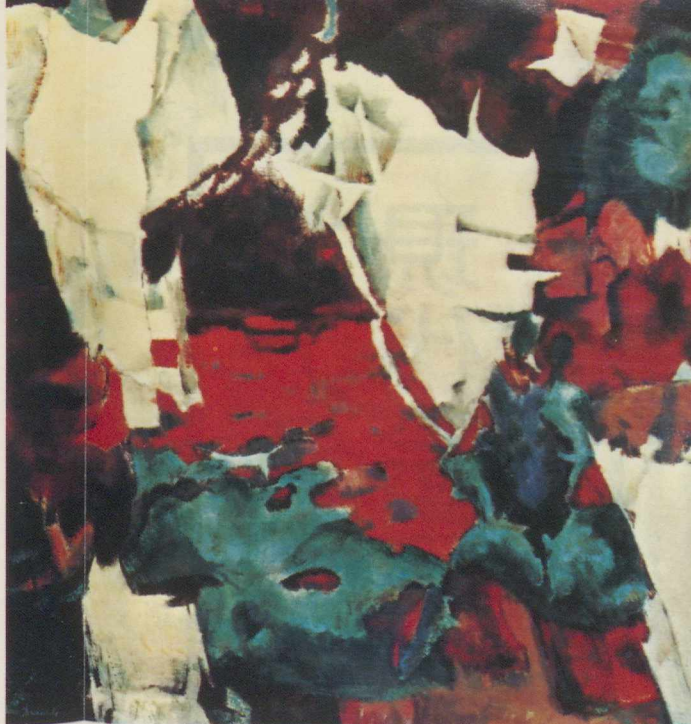
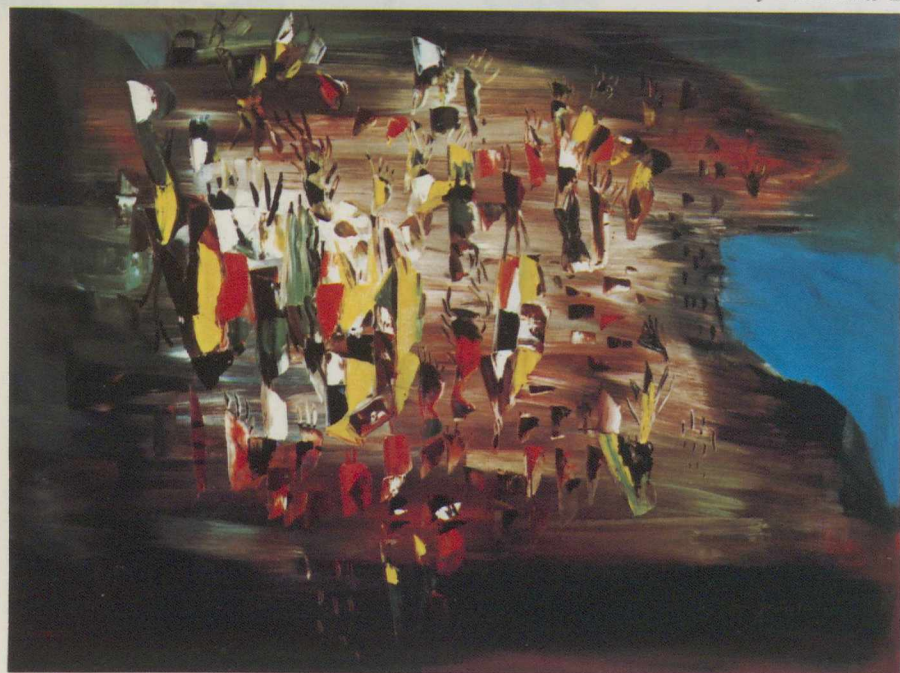




"Pavane(Triptych)" by Jean-Paul Riopelle(1923-



"All things prevail" by Jock MacDonald (1897-1960)



▼"Sous le vent de l'île" by Paul-Emile Borduas (1905-1960)



"Winter Theme No.7" by Jack Shadbolt

としていた。

ギド・モリーナリーとクロード・トウシニアンという二人の画家は、一度もレ・プラスティシアンに属したことはなかったが、同じような目的をもっており、最初の造形派が解体した頃、同志を誘って、第二の造形派グループを結成した。第一のグループと第二のグループの重要な差異は、今までヨーロッパの伝統に向けて来た目を、ニューヨークに向けてきたことにある。国際芸術における戦後最大のできごとは、いわゆるニューヨーク派が形成されて、芸術界の焦点がパリからアメリカに移ったことである。ケベック画家の新しい世代も、この移行を敏感に受け止めていた。ケベックの芸術界は今でも実験の場として活気に満ちているが、これは一九四八年に二十世紀カナダ絵画が誕生した土地として、真にふさわしいことといえよう。

トロントではスタートが少し遅れた。モントリオールの場合と同様、最も重要な一歩を踏み出したのは陣容を整えた非

具象派の画家たちであった。その中には、以前からそつと集りを重ねていたグループがあったが、お互い同士についても、お互いの作品についてもほとんど知らずにいた。しかし一九五三年になって、ウイリアム・ロナルドが自分の経営するデパートの従業員を誘って、アブストラクト芸術を中心としたホーム・デコレーションの推進に乗り出した。それに参加した芸術家七人が、共同展などを通じてさらに効果をあげる可能性を検討し始め、やがて新しく四人の芸術家の参加を得て、ペインターズ・イレブン(十一人会)を結成した。一九五四年に第一回展覧会を開催、ジャック・ブッシュ、ジョック・マクドナルド、ハロルド・タウン、ウイリアム・ロナルド、カズオ・ナカムラ、トム・ホッジソン、オスカー・カーアン、アレクサンドラ・リュック、ロイ・ミード、ウォルター・ヤーウッド、ホーテンス・ゴードン等による三十三点が出品され、画廊開設以来の大入りを記録した。その後五年間、この十一人会は定期的に合同展や個展を催した。一九五六年にはニューヨークの米国画家展にグループとして参加したが、その折り新聞で大好評を博したため、ついに国内でも強い関心を示すようになった。こうして一九五八年には、ケベックの画家ジャック・ドウ・トナングールの肝いりで、モントリオールのレコール・デ・ボーザール(美術学校)におけるグループ展が実現した。その翌年、十一人会は正式に解散した。社会に抽象芸術を認めさせ受け入れさせるという使命は果たされた、と彼らは自認していた。短期間ながら、成果は確かに驚くべきものがあつた

変化への気運にさらに大きく貢献したのは、一九五五年、カナダ国立美術館に新館長が就任したことであつた。彼はカナダの現存画家に深く共鳴し、就任後最初の一年間に、カナダ画家二十六人の作品を国立美術館で購入したばかりでなく、全国を回って百五十八回にわたって現代芸術および国立美術館について啓蒙する講演を行った。

カナダ西部の芸術開花

あたかも彼の置き土産のように、四十年代モントリオールで始まり五十年代初期トロントでも芽生えを見せた芸術の開花が、こんどは西部でも見られるようになった。五十年代後期には、モントリオール、トロントに代わってカナダでも最も予想外と思われた地方の一つ、サスカチュワン州レジャイナが芸術の中心地となった。五十年代、サスカチュワン大学の芸術学部は米国の画家、美術批評家、そして作曲家までも客員講師として招へいし、アート・シリーズを開講した。中でも特に強大な影響力をもっていたのは、ニューヨークから招へいされた色彩画の大家バネット・ニューマンと、同じくニューヨークからの美術批評家クレマント・グリーンバーグの二人で、後者が色彩画、すなわち、後にポスト・ペインタリー・アブストラクションと呼ばれた技法の最も有力な解説者であつたことは論をまたない。ニューマンの人格と信念に接した受講者たちは、新しい、かつてないほど真剣な創作欲に燃えた。一九六一年には、「レジャイナからの五人の画家」と銘打った展覧会が開催された。これは非常に見ごたえがあつたため、国立美術館

はこれを再編成して全国各地で移動展を開いた。グリーンバーグがレジャイナに来たのは一九六二年夏で、色彩画の画家仲間の大半が深甚な影響を受けた。

こうしたレジャイナの現象とほとんど時を同じくして、バンクーバーもカナダ芸術界の注目を浴びつつあつた。太平洋岸地方を芸術的に目ざめさせた原動力はジャック・シャドボルトの教師および画家としての強力な個性と有能なリーダーシップであつた。一九五九年にはロイ・キョオカが燃えるような創作欲とニューヨーク好みの作風をたずさえてやってきた。彼の活動と指導者の存在が刺激となつて、それまでブリティッシュ・コロンビアの画家を主流からへだてていた障壁は崩れ去つた。以来、現在にいたるまでバンクーバーはモントリオールならびにトロント、ロンドンと同様の創造活動の中心地として認められ、絶えず国際的関心に値する作品を発表してきた。

この活況の支えとして特に力があつたのは、バンクーバー美術館の活発かつ想像力に富む運営と、ブリティッシュ・コロンビア大学美術館の企画である。

現在、西部海岸地方の視覚芸術に最も大きく貢献しているものの一つとしてインターメディアを挙げる人が多い。これは、六十人ばかりの芸術家からなるグループで、例えば、視覚芸術と詩、ダンス、音楽の組合わせなど、関連芸術分野間の協力の場を求めて一九六七年に結成された。インターメディアの試みは単に工芸を主とした分野に限られているものではなく、仲間同志や観客の知的、美的視野を広め、また芸術界において極めてまれな創作的協力の例を示すことになった。

スに達した。これを一つのドラマと見るならば、それは六十年代初期から迫力を加えてきていた。

まず、グレイト・アート・ブームがトロントを中心として起こつた。六十年代初めにマスコミが取り上げたこのブームの主なきつかけとなつたのは、一九六一年に爆発的人気呼んだハロルド・タウンの個展であつた。実際の盛り上りはその二、三年前から始まっていて、美術界の売上は五倍にはね上り、取引ベースで見た非具象作品のマーケット・シェアは約十パーセント(次ページへつづく)